## 1．目的

　現在の日本社会では、昔ながらの見合い結婚は激減している。厚生労働省の出生動向基本調査によると、2005～2010年の結婚に占める見合い結婚の割合はわずか5.2％で、ほとんどが恋愛結婚である。しかし、その一方でいわゆる「婚活」と呼ばれる活動が広がりを見せている。婚活は、イベントパーティなどに参加して積極的に結婚相手を探すのだから、現代的な見合い結婚ということもできるだろう。そう捉えるならば、現在は恋愛結婚の一方的な広がりから見合い結婚を見直す揺り戻しが始まっているのかもしれない。

　婚活という新しい見合い結婚の広まりによって、夫婦関係の質はどう変化するのだろうか。一般的にいえば、見合い結婚よりも恋愛結婚の方が満足のいく結婚生活に結びつきやすいと予想される。恋愛結婚は、比較的長い期間付き合うことで、相手のよい点も悪い点も理解した上で結婚に至っていると考えられるからである。

　しかし、もう少し細かく考えると、短い交際期間であっても相手をよく理解できていればよい夫婦関係が築けるのか、それともやはり時間の積み重ねによる思い出が必要なのか、といった疑問に対して、簡単に答えは出せない。恋愛結婚と夫婦関係の満足度がどのように結びつくのか、その関係図式をはっきりさせなければ、婚活の広がりの影響を考察することはできない。

　そこで、この報告では共分散構造分析によって恋愛結婚が夫婦関係の満足度を高める仕組みを明らかにする。関係図式の中でどのパスの影響力が大きいかがはっきりすれば、婚活の広がりによって何が起こるかを予想する助けになるはずである。

## 2．方法

　分析には、2005年10～12月におこなった「中高年の幸福感についての意識調査」を用いる。この調査は、東大阪市在住の40～59歳の男女から無作為抽出した標本調査で、郵送法により246人の回答を集めた（計画標本700人、回収率35.1％）。今回分析するのは、結婚していて回答に欠損のない194ケースである。

　使用する変数は4つで、記述統計は表1のようにまとめられる。「結婚相手の理解：性格」は、結婚時に相手の性格をどのくらい理解していたかである。

表1　使用する変数の記述統計

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 標準偏差 |
| 恋愛結婚ダミー（Q9） | 0 | 1 | 0.67  | 0.47  |
| 結婚相手の理解：性格（Q12） | 1 | 5 | 3.16  | 0.98  |
| 結婚満足度（Q16） | 1 | 5 | 3.81  | 1.08  |
| 交際年数（Q10とQ11の差） | 0 | 20 | 2.71  | 2.88  |

　これらの変数について、図1のような関係図式を想定する。メインのパスは、「恋愛結婚であれば交際年数が長く、交際年数が長ければ相手を理解できており、相手を理解できていれば結婚満足度が高まる」という3つの矢印で構成されている関係である。それに加えて、「恋愛結婚であれば交際年数に関係なく相手の理解が深いであろう」という関係と、「交際年数が長ければ性格の理解とは関係なく結婚満足度が高まるだろう」という関係を想定する。このパス図を共分散構造分析（AMOS ver.20）で分析し、どのパスが実際に強い関係を示すのかを確認する。



＋

＋

＋

＋

＋

図1　想定するパスモデル

## 3．結果【今回は「結果」は穴埋め式で】

　共分散構造分析を行なった結果、図2のようなパス係数が得られた（標準化している）。

【AMOSで分析作業をして、結果の図式を貼り付ける。Wordで「トリミング」すれば、余白を削れる。適合度の指標として、モデルとデータの乖離検定の「自由度、χ2値、p値」、および「AGFI」の値を載せる】

自由度= 、χ2= 、p=

AGFI＝

図2　AMOSの分析結果

　χ2値による乖離検定の結果は有意でない。また、AGFIの値は90％を超えている。これらの指標から、このパスモデルは（データからかけ離れている／データに十分適合している）ということができる。

　パス係数の検定結果を確認すると、5つのパス係数のうち値が0.3以上と比較的大きいパス係数（　　　）個が5％水準で統計的に有意であった。また、交際年数から（　　　　　　　）への関係も5％水準は満たしていないものの有意な傾向を示している。一方、交際年数から（　　　　　　　）への影響は、統計的には有意とはいえない。

　これらのことから、結婚満足度が高まるためには、ただ交際年数が長く思い出が多いだけではだめで、相手の理解が必要であることがわかる。そして、恋愛結婚は相手の理解度を高める効果があるが、これには恋愛結婚ダミーからの直接効果に加えて、交際年数を媒介した間接効果も存在する。直接効果は（　　　　　［数値］）なのに対して、間接効果は（　　　　　　　　　　　　　　　［算出式］）と計算できるので、圧倒的に直接効果の方が大きい。つまり、恋愛結婚は交際年数が長い傾向があることは事実であるが、そのために相手の理解度が高まるということはあまりなく、単に「恋愛」によって相手の理解度が直接高まる、ということである。

　決定係数を確認すると、このパスモデルで、最終的な結婚満足度の（　　　　）％が説明できることがわかる。あまり高くはないものの、無視できるほど小さくもない。

## 4．考察とまとめ

【以上の分析結果をふまえて、結局、恋愛結婚と結婚満足度の関係の仕組みはどうなっていることがわかったのか。この図式から、イベントパーティ等による婚活は結婚満足にどう影響すると予想するか（明確な答えがあるわけではない）。今回の調査や分析に改善すべき問題点はないか。といったことなどを考察する。また、最後には、結局何をしようとして何がわかったのかを簡単にまとめ直すこと】

【別途、表紙を付けて、レポートのタイトル（自分でつける）、氏名、学籍番号、提出日、授業名などを記すこと】

## ＊＊＊　小課題　＊＊＊

　Webページ（http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tyasuda/）から「小課題用データ」をダウンロードして、指定されている共分散構造分析を行い、このレポートを完成させなさい。

　今回の課題は、「結果」は完全に穴埋めでよい。「考察とまとめ」の文章はオリジナルのものを作成すること。（1月8日提出、1月22日でも減点で受け付けます）